
未完成パズル

緑川結羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未完成パズル

【Nコード】

N1139J

【作者名】

緑川結羽

【あらすじ】

ある人との出会い。

その出会いは、私の運命を変えた。

ある人の過去は自分と繋がっていて、その人のせいで、人生の歯車が狂い出した。私に罪の刻印が押された。そんな切ない出来事に終止符が打たれたにも関わらず、残る過去の記憶を抱えながら、主人公は強く生きる。

第1章：残酷な出会い（前書き）

私は断じて、マッチョが好きじゃありません！

第1章：残酷な出会い

桜が満開に咲いたある日、私は彼と会った。

彼は満開に咲いた桜を眺めていた。私は声をかけずにはいられなかった。「あの…、」

私は何を言おうとしたのか自分でもわからなかった。でも、彼は真っ直ぐな目で、私を見て言った。

「はい？何でしょうか？」

その一言が耳に響く。私は、何も言えなくて、うつむいた。ふとしたを見ると、私の愛読書「プッチョにマッチョにプロテイン！」があった。

私はそれを拾い言った。「あの…本、落ちてますよ。」

彼はニッコリと笑い、

「ありがとう」

といい私から本を受け取ろうとする。そして、彼が本に触れようとした瞬間、

「あの！」

と思わず、大きな声をだした。それに驚いた彼は手をひっこめた。私はゆっくりといい直す。

「あの、私、プッチョにマッチョにプロテイン！のファンなんですけど、どうしても、第9巻が見つからないんです！あの、もし、持っていたら貸してくれませんか？」

彼は、一瞬驚いたような顔して、それから、また優しい表情になって言った。

「すみません。それが…僕も持っていないんです…。」

その言葉を聞いて、私は、ゆっくりと後ろを向き、「すみません。」と小さな声で呟いて、歩きだした。すると、いきなり肩を叩かれた。私が振り向くと、彼は、言った。

「もし、良かったら、一緒にさがしませんか？この辺りはたくさん

本屋さんがありますし…。それに一人で探すより、いいですよ。」
私は、いきなりの言葉に少し驚いていると、彼は残念そうな顔を
して、

「そうですね。名前も知らない、赤の他人に、そんなこと言われ
ても警戒しますよね。僕は、橘蓮です。」

彼はニッコリと笑った。「プッチョにマッチョにプロテイン！のフ
アンに悪い人はいませんよ。一緒にさがしましょう！」と私は彼
の手を引いた。そして、色々な本屋さんを行ったがなかなか見つ
からない！そして、たまたま見つけた小さな本屋さんにプマッチョ
（プッチョにマッチョにプロテイン！の略）第9巻はあったが…、
一冊しかない。どうしよう…。すると彼は言った。

「どうぞ買ってください。先に欲しがっていたのはあなたでしょ？
その代わり、あなたの名前教えてくれませんか？」

私は本をギュッと握りしめて言った。

「本田紗季です。」

彼は私に近づいて来ると言った。

「紗季ちゃん。やっぱり、僕も、読みたいから、紗季ちゃんが読み
終わったら貸して！っていうのは君にまた会うための口実だけど、
読み終わったらここに電話してね。」と橘さんは私に紙を渡した。

「僕、これから用事があるから、また会えるのたのしみにしてるよ
！紗季ちゃん☆」

そう、これは残酷な出会い。

神様がいるとしたら、神はなんて残酷なことをしているのだろうか？

第1章：残酷な出会い（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。

第2章：知ってはいけなかった…。（前書き）

はい。大変遅くなりました。また頑張ります！

第2章：知ってはいけなかった…。

プツチヨにマツチヨにプロテイン！第9巻く愛犬との別れく

僕、マープ。マープって言うのは僕のあだ名。

高野正也って言うのが本名だけど、ブタみたいに太っていて、正也って名前のマとブタのブでマープ。僕、実は、友達の殿と神（あだ名）と一緒に学校で犬を飼っています。もちろん秘密です。犬の名前はチビ。まあちっちゃくて、細かったからそんな名前になったんだけど。

ちびのご飯は神と殿と僕の三人で交代で給食のパンをちびにあげに行っていました。そんな毎日が続いていたある日、その日のちびの餌やり当番は僕で、いつものように手を叩いてちびを呼んだんです。ちびは僕に近寄り、パンをたくさん食べます。

すると後ろからき慣れた泣き声があ…。「うおー！マープ！俺は今猛烈に感動している！こんな可愛い子犬、どこで拾ったんだ？」と担任でマツチヨの松本がいました。僕は、一つため息をついて、

「学校の近くの土手です。」

と言ったんです。すると、松本は涙を拭いながら、こう言った。

「よし！分かった！かわいそうだからこの犬は俺が飼ってやる！」

僕はこんな脳みそまで筋肉のやつに犬なんて育てられるのか心配だったけど、松本に見つかってしまった今そうする他なかった。

「…チビをよろしくおねがいします。」

と僕は松本にいい残し、校舎へと戻った。

校舎に戻って、僕は殿と神に事情を話した。

二人は深く頷いて、

「これで良かったんだ」　と言ってくれた。

1ヶ月後

「これから準備体操に腕立て伏せをする。お手本にゲストを呼んだ。」
と松本がいいながら、笛を吹いた。
ワンワンと犬の鳴き声が聞こえる。

「ゲストのチビだ。」

とそこに出てきたのは、僕たちの知っている小さくて弱そうなチビではなかった。

マッチョ犬のチビになっていた。

松本の隣で勇ましい顔をして腕立て伏せをしているマッチョ犬チビをみて悲しくなる僕でした。

PS、後から聞いた話だと松本は毎晩、チビの餌にプロテインを入れていたそうです。

プッチョにマッチョにプロテイン！第9巻―終―

私は本を閉じ一息ついてから携帯をてに取った。ここで迷う。電話していいのか？と…。

私は携帯を持ったり置いたりを繰り返した。

「よし！」

といい私は橘さんに電話をかけることにした。

トゥルルルルという音が受話器から聞こえてくる。

「もしもし？」

と受話器の向こうから橘さんの声が聞こえてくる。

「本田紗季ですけど…」　と私がいうと、

「あっ！紗季ちゃん！もう読み終わったの？」

と低いけど優しい明るい声が聞こえて来た。

「えっと…。本はどこでお渡しすれば…」

と戸惑いながら言った私に橘さんはいたずらっ子のような声で

「ゲームしようよ。紗季ちゃん」

と言った。そして橘さんは私の返事を待たずに言った。

「ルールは簡単。僕が指定した場所にたどり着いたら紗季ちゃんの勝ち。勿論。ヒントは出すよ。スタートは東の教会からだよ。教会に着いたら、また僕に電話してね★」　と言って橘さんは電話を切った。

私は少し沈黙してからとりあえず、東の教会に行くことにした。

バスを乗って、丘を登ってやっと教会に着いた。　私は携帯を取りだし、橘さんに取り出した。

「もしもし？橘さん？つきましたよ？」

と早口に言った私に橘さんは

「じゃあ。ゲームの開始だ！」

と言った。

「まず、第1ヒント。キラキラ輝く天の川。」

と静かに言った。

私はよくわからないが歩き出した。天の川？見える訳ないじゃん？

私は歩き回った。すると、教会の横にきれいな小川が流れている。

近寄ってみると、光が水に反射して光っている。　「これか！」

と私は呟いて、また橘さんに電話した。

「もしもし？見つけましたよ？」

と私が言うのと橘さんは次々にヒントを出して来た。やっと最後のヒントになった。

「最後のヒント。緑の羽があり緑の楽園。」

私はよろよろになりながらモタモタと歩く。

最後だけに難問らしく、　私は倒れそうになる。そこに現れたのは緑の楽園。緑の羽がたくさん敷き詰められている。

するとそこから橘さんが現れた。

「ずーと待ってたんだから…。」

と言う橘さんに私は

「何でこんな面倒臭いことを？」

と聞いた。橘さんは

「暇潰し」

と言った。けど…なんか違う気がする。

橘さんは小さな声で、

「ごめんな。」

と言った気がする。何がごめんなのかわからなかった私は聞こえなかったふりをして

「はい。これ…。またここで。3日後待ってます。」
と言って家に帰った。

家に帰ると兄さんがいた。するといきなり兄さんは私に言った。

「父さんの墓参りに行かないか？」

そう。父さんはしんだ。一年前、誰かに殺された。だけど、兄さんは父さんの墓にお供えに行くのではなく、父さんの大事な場所へ墓参りに行っていた。私には教えてくれなかったけど。私の足じゃ行けない場所なんだって。だけど、兄さんは一緒に行こうと言ってくれたので私は言った。

「行く！」

と。兄さんは静かに微笑んだ。

それが悲しみの始まりだった。もし、この時、紗季が墓参りにいかなければ、普通の恋愛が始まっていたかも知れない。これは知っちゃいけないことだった。

第2章：知ってはいけなかった…。（後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございます。

これからどうなるでしょうこの物語？

私でも分かりません。がまた頑張るので応援よろしくお願いいたします。

第3章..もう戻れない

今、私、本田紗季は兄さんと一緒に父さんの墓参りに行くところで
す。

バスを使って、前みたことのある教会につきました。橘さんと変な
ゲームをした時来た、教会です。兄さんは少し寂しそうな顔をして
教会をみた。

そしてまた私たちは歩き始めた。

ずっと一言も話さずに歩いていた。次々と昨日みた景色が流れてい
る。

「ついたぞ。」

と寂しそうに笑う兄さんが言った。

私は

「うん」

と言い、辺りを見回した。

そこには、昨日、橘さんときた場所であった。“緑の楽園”だった。

「ここに父さんはいるんだ。ずっと…。」

風に髪をなびかせながらいう兄さん。

父さんのいる場所。私は昨日橘さんが座っていた木のほうを見た。

木の上に人影がある。

人影は私のほうを見た。

「紗季ちゃん？」

確かに人影がいった。

「えっ！」

と私は驚きの声をあげながら人影のほうへ歩みよる。

「橘さん？」

私が問いかけると人影ーもとい橘さんは木から飛び降りた。

その一部始終を見ていた兄さんは驚いたように目を見開き、言った。

「橘…！」

「こんにちは。本田さん。」

と冷ややかな表情で言った橘さんに私は驚きを隠せない。

「橘さんは兄さんと知り合いですか？」

そんな言葉を漏らした私に兄さんは怪訝そうな顔で、

「知り合い…？ そんなんじゃない！」

と言った。

橘さんもただうつむくだけだった。

兄さんは憎しみを込めた声で言った。

「こいつが、父さんを殺したんだ。」

と…。

この時知った、死の重みと兄から発せられるはずのなかった言葉にただ驚くことしかできなかった。

第4章：私の罪

「こいつが父さんを殺したんだ。」

兄さんが言った。

橘さんは否定しない。

私はどうしたらいいのかわからない。ただ、ただ泣かないようにしているだけ。

なんで父さんを殺めてしまったのか、私は橘さんに聞きたい。

そして、神様に聞きたい。

なんで私と橘さんを出会わせたのか…？

兄さんは橘さんを恨んでいるのだろうか？

そして私も橘さんを恨まなければいけないのか。そんなことをして本当に父さんは喜ぶのか。

私はよろよと歩きだす。

自分でもどこに向かっているのか分からない。

気がつくと私は崖から落ちそうなところにいた。

死にたくない。死にたくないけど、この状況をどうしていいのか分からない。生きるのが怖い。

そう思いながら崖のしたをみた。

足元を崩し、私は崖のしたへ落ちていった。

薄れていく意識のなかで 「紗季！！！」

と叫ぶ兄さんの声が聞こえた。

――――
こは病院だった。

私は死ななかつたらしい。
でも私の横で母さんが泣いている。

（この涙はなんだろう？わたし、生きてるのに。）
わたしは母さんに話しかける。

「心配かけてごめんなさい。私、もう大丈夫だから、泣かないで。」
母さんは静かに笑った。そして私はお気楽に

「兄さんは？」
と聞く。

母さんはまた悲しい顔をして言った。

「死んだわ。」

信じられない言葉に私はそのまま固まる。

「冗談だよね？」

私は出ない声を振り絞って言った。

母さんは首を横に振る。「ねえ、母さん！

嘘だって言つてよ！ねえ：お願いだから：。」

そう言いながら私は母さんの体を揺する。

ガラッ！

とドアの開く音がした。私はドアに視線を移す。「紗季ちゃん

：。」

橘さんだ。

「ねえ、橘さん、兄さんが死んだなんて嘘でしょ？ねえ、そうだよ

ね？」私は必死に言った。

「少し落ち着いて：」

と言った橘さんは重い、雰囲気を感じた。

「話さないといけないことがあるんだ。ちょっと外で話さないか？」と低い声で言った橘さんに私は頷いた。

私は病室のドアのぶに手をかけた。

そして、橘さんが部屋を出るのを確認してからゆっくりと歩き出す。

私達は無言で歩く。

橘さんはいきなり立ち止まった。

「どうしたんですか？」と私が尋ねると橘さんは呟いた。

「ここ、幸助さんの病室。」

幸助とは兄さんの名前。病室の扉には本田幸助と書いてある表札がある。そこへ橘さんは迷いもなく入って行く。

私も橘さんの後を追って病室に入った。

病室には安らかに眠る兄さんが居ました。

「なんだ、生きてる：。」

私がそう言うのと橘さんは静かに言う。

「生きてはいるよ：。」

「何ですか？その言い方。兄さんがもう動けないみたいない方しないてください！」

と私は口調を強めて言った。

「性格には動けないじゃなく、動かないだ。」

「どういう意味ですか？」

橘さんの意味のわからない言葉に私は疑問をぶつけた。

「つまり、死んだってこと。植物人間になったんだよ。」

いつになく低い声で言った橘さん。

2回聞いた、「死んだ。」と言う言葉。

「本当に兄さんは死んだの？」

私は橘さんに訊ねた。

「君をかばうようにして亡くなっていたよ…。」
橘さんは私を見つめて言った。

「嘘でしょ？」

橘さんは黙り込む。私は取り乱す。

「私のせいだ！私が死ねば良かったんだ！」

「そんなことない！」

と言った橘さん。

「そんなことない。俺が悪いんだ。」

もう一度言った橘さん。 「俺があの時紗季ちゃんに会わなければ。」

と悔しそうにいう。

「橘さん。」

と呟き、私は橘さんに近づく。

「俺が紗季ちゃんのお父さんを殺さなければ。」 と橘さんは言った。

「紗季ちゃんと同じ罪は俺にもある二人でわけあおう。」

と悲しそうに言った橘さんに私は

「はい。」

と答えた。

「そして聞いて欲しい。紗季ちゃんのお父さん―基本田さんを殺してしまった理由を：。」
と橘は苦しそうに言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1139j/>

未完成パズル

2010年10月8日22時42分発行